

A. タタリノフ『レクシコン』注釈8 (Y~X)

— 付：ザ行とダ行の混同について —

江 口 泰 生

付：ザ行とダ行の混同について

はじめに

『レクシコン』は日常語彙が生のかたちで掲載されていること、音形が具体的に分かること、古い下北方言を如実に反映していること、古い東北方言の体系を帰納できることなど、言語資料としての価値が高い。「実在しないのではないか」と思いながらも調べていくと、そういう語形が実在することが判明して驚かされる。個々の語彙の解明は個人的な興味に墮する恐れもあるが、場合によっては言語体系の捉え直しに繋がることもあるのではないか。それが可能な『レクシコン』は東北方言文献の一次資料といって良いと思う。

『レクシコン』におけるザ行とダ行の混同例

014aに「зоря утренняя」(朝の星)に「асано миоддо あさの みをちやう」とある。村山七郎『漂流民の言語』(吉川弘文館、1965)では「mjoddo」と転写し、「ミオッド」とカタカナ化する。村山のローマ字転写「mjo」なら拗音で「ミョ」であるが、キリル文字日本語の表記では「ミオ」と割っている発音を反映しているように見える。また「明星」に相当する語を「ミオッド」と写していて、「ジョ」と「ド」の交替に見えるが、不審な語形である。

江口泰生 2015「A. タタリノフ『レクシコン』注釈3 (ж~и)」(『岡山大学文学部紀要』63 p49~63)では次行からみて原文は「миоджо」の書き間違いだと思う」と述べた。次行というのは、014a「+звезда вечерняя」(夕方の星)という見出しロシア語に「банно миоджо ばんの みをちやう」とあって、「バンノミオヂョ」(晩の明星)と読める語彙があるからである。つまり「ヂョ」と書くべきを「ド」と間違えて書いたと考えたのである。しかし今から思えば、なぜ間違えたのかということまで掘り下げべきだった。

2016年7月、国立国語研究所に資料調査に赴いた。東京はまだ梅雨も空けず、小雨が降っていて、寒いくらいであった。都知事選の選挙カーが候補者名を連呼しながら疾走していた。

図書館で製本されている『青森県方言資料集』一~三に所収されている各種方言集をめくっていると、驚くべきことに、松木明『弘前語彙』(私家版 昭和29)に「アゲノミョウドウ(名)明け方東天に見える金星。明ケノ明星の意。明星ともいう。ヨエノミョウドウ(宵の明星)に対する

語」とあるのを見つけた。「ミョウドウ」という語形が実在したのである。

『弘前方言』は手書き、謄写版。著者の松木明は青森県立図書館のホームページなどによると、明治36年に弘前市生まれ。大正13年、東京大学医学部に入学、「人血液の血清科学的研究」によって学位授与。昭和9年、帰弘し、34年まで開業。津軽を心から愛し、医学、歴史学、民俗学、文学、言語学を駆使した学際的な研究は高く評価され、昭和32年に東奥賞受賞。昭和40年に青森県文化賞を受賞している。記述のレベルは高く、信頼しても良いと思う。小倉肇『津軽方言地図』（津軽書房、1988）の「まえがき」にも、松木明の業績について「中津軽郡については、30年前に松木明氏が調査をされている」というように研究の重要な一端を担うものとして位置づけられている。

『弘前語彙』が信頼できるとすると、かつて「ミョウドウ」（明星）という語形が存在しており、『レクシコン』はそれを書こうとして「ミオッド」（明星）という語形を書いたと想定される。ただし『レクシコン』次行には「ミオヂョ」という語形があること、「ミオッド」という語形は促音のあとに濁音が位置していて考察の余地がある¹こと、ひらがな日本語にも「みをちやう」とあることから、タタリノフは「ミョウジョウ」と「ミョウドウ」という語形の間で揺れがあったものと思う。

このように思うようになったのは、前掲の松木『弘前語彙』の「ミョウドウ」という語形の発見もあるが、もう一つの材料が『レクシコン』にあることを思い出したからである。

037aに「тетеря」（やまどり）というロシア語見出し語がある。これに対して「きつ；きち」というひらがな日本語が当てられている。キリル文字日本語は「киду」の「ду」の上から「жи」を上書きして「кижи」に訂正している。「キドゥ」を「キジ」に訂正した、ということである。村山1965では「ジの表わし方が動揺している」という指摘がある。村山1965では『レクシコン』の四つ仮名について論じており（149頁）、「ジの表し方が動揺している」（174頁）という説明には四つ仮名の混同と関連させようとする意図があったかもしれない。

『レクシコン』の体裁からみて、最初に「киду」と書き、そのキリル文字日本語からひらがな日本語「きつ」が宛てられた。次にそのキリル文字日本語が誤りだと考えて「киду」の「ду」の上から「жи」を上書きして訂正して、最後にそれを反映して「きち」というひらがな日本語が宛てられたと考えられる。

タタリノフは最初に書いた「киду」は誤りとしたということだが、先の「明星」の例と併せて考察してみると、ジョとド、ジとドゥ（ヅ）の認定にユレがあった可能性がある。これらは「ジの表し方」という問題とはやや性質を異にし、ザ行とダ行の混同に属する現象なのではなかろうか。

上代語におけるサとタの混同

ザ行とダ行の混同については史的研究と方言研究の二つの観点からの研究がある。前者、史

1 高山倫明『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房、2012）「促音の音用論」に、鼻音性を持つ濁音の地域と「促音＋濁音」の音連続を持つ地域が相補的分布をするという指摘がある。「ミオッド」という語形は促音のあとに濁音があるので、高山の指摘に違反するわけであり、さらに考察する必要があると思う。

的観点からの考察は、管見のかぎりでは小林芳規、岸田武夫、杉藤美代子などの研究がある。後者には杉藤美代子の一連の研究がある²。

小林芳規は1971「中世片仮名文の国語史的研究」(『広島大学文学部紀要』30)で鎌倉時代の「アザナ」と「アダナ」の混同例をあげ、さらに『悉曇要訣』のサ行とタ行の相通現象の記事と関連させている。小林はザ行・ダ行の混同をより古い時代に遡らせたいという考えがあり、その考えが『悉曇要訣』に関連づけるという発想にいたったのではなかろうか。

アザナ～アダナの混同については後述するとして、まずサ行・タ行の相通がザ行・ダ行の混同と同じ理由によるものかどうかが問題である。

サ行とタ行の音価について『悉曇要訣』を利用したものには、馬淵和夫1959「上代タ行頭音の音価について」(『言語と文芸』昭和34年1月号)、同1959「上代・中古におけるサ行の頭音」(『国語と国文学』昭和33年1月号)(ともに『増訂日本韻学史の研究 II』再録)がある。

タ行サ行の相通現象は『悉曇要訣』以外でも上代に広く見られるものである。『万葉集』の「太刀」(タチ)を東歌で「タシ」と書いたような例(これはサ行音価が東西で相違したせいかな…有坂『上代音韻攷』)や『風土記』の地名起源説話の例(後述)などが挙げられる。

しかし、本稿で扱うのは「ゾウ(象)」を「ドウ」と言ったりするような、ザ行とダ行の混同である。この場合、清音サ行と清音タ行は混同しないのに、濁音のザ行とダ行が混同する、ということが重要だと思う。清音と濁音で調音点(方法)に違いがあったと考えざるを得ない。そしてそのほうがこの問題を正しく捉えることができると思う。後述するようにザ行とダ行の混同の時期は室町時代以降に生じた現象であって、サ行とタ行の相通現象とは別の現象だと考えられるからである。

『風土記』の地名起源説話におけるサ行とタ行の混同

小林が『悉曇要訣』の記事を取り上げたためか、サ行タ行の相通がザ行ダ行の混同と関連付けられるようになった。杉藤美代子の研究の対象は主に方言であるが(後述)、史的観点からの発言もある。杉藤1996『日本語音声の研究3 日本語の音』(和泉書院)第二章ではザ行・ダ行(そしてラ行)の混同の全国の実態、近畿圏の具体相が詳しく調査されているが、悉曇学者の観察に触れ、次に豊後風土記の地名のサ行・タ相通現象を取り上げて、「有坂秀世(1955)、『上代音韻攷』を指す…江口注)は、平安初期のサの頭音は[tsa]であるが、その以前は[tʃa]であったと推定して、風土記編纂当時、九州ではサとタとの音が近い状態であったと指摘している」(波線、破線は江口)と総括した(著作集2の97頁)。

杉藤が指摘する悉曇学者の観察(小林も同)は前述のように、もともとは馬淵和夫(『日本韻学史の研究 II』再録)が指摘する『悉曇要訣』記事であろう。これについては前述したので、ここでは除外する。

2 他にも有坂秀世『上代音韻攷』(三省堂、1955)497頁には方言におけるザ行とダ行の例を服部四郎の研究を引用する。服部四郎の研究とは『日本語の系統』(岩波書店、1959)317頁のものである。しかし、これは1行程度の報告である。この問題を真正面から取り扱ったのは、杉藤の一連の研究であると思う。

また杉藤は有坂『上代音韻攷』を引用して上述のように総括するが、どこにそういう記述があるのか、見つけられなかった。むしろ逆に有坂はサ行タ行の相通の事例を挙げて、(サ・タ、ス・ツ、ソ・ト)の「子音が相近かったことを證するものとはいへない」(488頁)とか、地名起源説話について「説明される地名と説明する地名との間には、必ずしも外形の完全な一致を必要とせず、両者の形の単なる類似のみによつても説話は成立し得るのである」(539頁)と述べている。したがって杉藤の総括は、有坂が前掲引用文の波線部のように推定していて、以上の例から私(杉藤)が再解釈すると破線部のようになるということであろうか、少し論述に曖昧な点がある。

次に杉藤が挙げた『豊後風土記』における地名起源説話の相通現象は次のような例である。岩波大系の読み下しによって示す。ひらがなは岩波大系により、片仮名で私案を添えておく。用例の▽印はこのようにも訓めるとの意味で私に付けたものである。

- (1)久津(ひさづ)媛の郡といひき。今、日田(ひだ~ヒタ▽)の郡と謂ふは、訛れるなり。
- (2)名を臭泉(くさいづみ~クサミ▽)といひ、因りて村の名と為しき。今、球單(くたみ)の郷と謂ふは、訛れるなり

杉藤は(1)(2)を根拠に九州においてサ行とタ行の音価が紛れることがあったとする。しかしこの考えには問題がある。問題の一は「九州」に限定したことである。『風土記』を通覧すると(1)(2)以外にもサ~タ相通の例があり、九州と限定できないことが分かる。『播磨風土記』「飾磨郡」に次のようにある。

- (3)「佐志野(さしの)と號(なづ)く。今、改めて多志野(たしの)と號く」

このようにサ~タの相通は九州に限らないからである。この点は上代のサとタの相通が地域を問わず、広く行われていたということかもしれないので、杉藤説に有利かもしれない。

問題の二は(1)~(3)はいずれもサからタへの変更であり、共通性を持つ。これは何らかの意味を持つとは思ふものの³、前述したようにサ行とタ行の相通がザ行とダ行の混同に直接に繋がるものではないということである。

問題の三はなによりも『風土記』の地名譚をそのまま根拠にして、音韻の一致を論ずるのは難しいということである。『備前国風土記』(逸文)には「牛轉(うしまろび)と曰ひき。今、牛窓(うしまど)と云ふは訛(よこなま)るなり」とあることを根拠にして、r~dの混同が生じていたといえるかどうか、『播磨風土記』「賀古郡」の「密事(むつびごと)を成したまひき。故、六継(むつぎ)の村といふ」という記録からビ~ギの混同があったといえるかどうかである。

岩波大系『風土記』頭注では「現地名が音訛(誤)で、本来はそうでないというのは地名の由来を伝承説話に結びつけ、説話に偏して説明し、その説明を価値づけようとする態度」(357頁)

3 有坂『上代音韻攷』1955ではタ行の一部の語はサ行を語源とするのではないか、という推定が述べられている。

と説明されている。極端に言えば、地名を神格の伝承の一部へ重ねることで権威づけができればそれで良い、ということが行われていたということである。

たとえば、佐竹昭広『古語雑談』(岩波新書)では『播磨風土記』の「アギの渡り」の地名起源説話を二段階で説明している。第一段階として「渡し場での交易の話は、「商(あき)の渡り」という意味で、地名アギの起源説話として、まず存在していた」。次の段階として「商(あき)の渡り」という語源が忘れ去られたために、「単なる取引きという内容だけでは、とてもアキという具体的な語音をつなぎとめる力はない。……後の伝承者たちが説話の中に「朕公(あぎ)」という言葉が登場させ、地名譚としての保存をはかるに至った」と説明している。

このように見てみると、地名起源説話の二語が、同一の音韻なのか、母音部分だけが一致すれば良いのか、あるいは語音が類似していれば良いのか、他の理由があるのか、二語の結びつけ方は伝承の発生や過程などの個々の事情によるものであり、そこが証拠として弱いのである。r~dは似た音韻(有声、調音点の近さ)と思えるし、ビ~ギは母音の一致、アキ~アギは清濁のみの相違、のようにそれぞれ異なるのである。

(1)~(3)の例で、なぜタ音をサ音に遡らせて起源説明するのか、謎は明らかにはならないが、少なくとも地名起源をそのまま音価の近似(または同一)と結びつけることは難しいのではないかと思う。有坂1955はサ・タ行相通について、具体例を挙げ詳細に論ずるが(487頁)、前述したとおり、これを音価の近似性の証拠とはしないのである。前掲539頁のような記述もある。

そしてたとえ音価の近似が主張できたとしても、すくなくともこれらはサとタの相通である。本稿では清音サ行と清音タ行は混同しないのに、濁音のザ行とダ行が混同する、ということに力点を置き、そしてそのほうがこの問題を正しく捉えることができるということを改めて強調したい。サ行とタ行の相通現象とザ行とダ行の混同とは直接的な関係はないと思うからである。その根拠は次に述べるようにザ行とダ行の混同の時期である。

仮名文書などにおけるザ行とダ行の混同

小林1993新日本古典文学大系56『梁塵秘抄 閑吟集 狂言歌謡』(旧日本古典文学大系73『和漢朗詠集・梁塵秘抄』の翻刻も新大系と同様)で、『梁塵秘抄』349の「さたへ」についての注釈(同書444頁)において、「アザナ」と「アダナ」の例を5例に追加し、また『梁塵秘抄』54「常啼」を表すのに底本では「常在」と表記すること(「在」字の左に「啼」字の訂正がある)などの混同例から、ザ行とダ行の混同があるとした。

このうち、「アザナ」と「アダナ」について、東大史料編纂所データベースを検索し、小林1993が挙げた例以外を示すと以下ようになる。

- (ア) (端裏書)「刑部丞康資沽却状 在以前沽却文」／うりわたしまいらせ候田三段事／
あたなとおかり(『鎌倉遺文 五巻』勝寺尾文書3448、嘉禄元年12月25日)
- (イ) こやのうち こまつ くろはし なかさ□ /屋敷一所 あたなかせやう(『鎌倉

- 遺文 六卷』、土佐安芸文書、嘉禄3年正月16日)
- (ウ) うりわたすしやうてんのしりやうの事 / 合三百文者 あたなひくち (『鎌倉遺文』山城勸修寺文書、寛元4年2月9日)
- (エ) 四至… (中略) … / あたなかきのきたち (『鎌倉遺文』近江老蘇八幡神社文書、応長元年12月27日)
- (オ) きしんし申 ^(東大寺)大佛とうゆてんの事 / 合壹段者 あたなしるかハ / 右、件田ハ、
円寛房さうてんのたなり (『鎌倉遺文』東大寺文書、四ノ六十七文保2年3月3日)
- (カ) あふみのくに をくのしまの しやうのうち、あたなし / らへのはくちきの (うちの)のえりなり (『鎌倉遺文』近江奥津嶋神社文書、元徳元年12月9日)

たしかに小地名の「字」(アザナ)に「アダナ」が当てられていることが分かる。小林の時代と違って、ありがたいことに現代ではデータベースのおかげで用例が簡単に拾えるが、手間の簡易さとは別に、そもそもアザナ～アダナの混同に多くの用例があることも分かる。こうした用例を元にして小林1971「ザ行音をダ行音に発音することが、当時(鎌倉時代…江口注)、地方文献には存在することに確信を持つに至った」と述べる。

しかし、ザ行とダ行の混同については以下に述べる二種類を区別すべきと考える。第一は「サザエ>サダエ」のような類で、ザ行とダ行の混同によって「サダエ」というまったく別語(新形)が生じる場合である。これはザ行とダ行の音韻の混同と考えてもよいと思う。

もう一つは「アザナ」～「アダナ」のように、もともと二語がある場合である。この二語は「あざなつくることはひむかしのゐんにてし給ふ」(源氏一乙女)のように「あざな=別名」、「露深き菊をし折れる心あらば千代のあたまは立たんとぞ思ふ」(古今六帖、紀貫之)のように「あだな=男女関係の噂、浮き名」というように、語形の似た二語が意味の違いをもって別個に存在する場合である。その意味が十分に離れていない場合が問題になると思う。

二つの場合を比較すると、前者はザ行とダ行の音韻的な混乱が生じてはじめて出現する例であるが、後者の場合、まったく新しい別語形が生ずるよりも、語彙的に紛れやすいのではなかろうか。たとえば「汚名返上」と「名誉挽回」が混同して「汚名挽回」が生ずる⁴とか、「カイコ(ゴ)」(蚕)と「カイコ(ゴ)」(卵)が衝突して新たに「タマゴ」(玉+子)が生ずる⁵とか、「とにかく」と「ともかく」が混同するとか、「つかまえる」と「とらえる」が混淆して「とらまえる」(西日本方言)になるとか、「おそろしい」「おっかない」が混淆して「おそがい」(中部地方)になる⁶とか、「いやがおうにも」と「いやがうえにも」の意味が混同する⁷とか、「愛想がつきる」なのに「愛嬌をふりまく」と混同して「愛想をふりまく」という言い方が生じるとか⁸、「一所懸命」の語源が忘れられ

4 平成15(2003)年度「国語に関する世論調査」(文化庁)参照。

5 亀井孝「鐘楼蝙蝠録」(『亀井孝論文集4』、吉川弘文館)、同「『捷解新語』の注音法」(『亀井孝論文集3』、吉川弘文館)参照。

6 徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書1979)掲載の言語地図(110頁)による。

7 平成26年度「国語に関する世論調査」(文化庁)参照。

8 平成27年度「国語に関する世論調査」(文化庁)参照。

他に存在した「一生」に引かれて「一生懸命」になるとか、「ハハクソ」が「ホクロ」になるにあたって別語「黒」が語形変化に介入したとか⁹、意味的に接点(共通点)を持つ、語形が似た二語が混同したり、同音衝突したり、混淆したりすることは枚挙に暇がない。それが何故、その時代に生じたのかという問題は個々の検討に委ねるが、意味的に接点を持つ、語形が似た二語が混同しやすいということが一般的にいえるのではなからうか。

事実、「アダナ」は「別名」に近似した「渾名」という意味を有するようになるのであるから、「別(の名)」「別(の噂)」や、「正式でない(名)」「正式でない(噂)」などの、共通因子を原因として「アダナ」と「アザナ」が衝突したり、あるいは混同した可能性は高いのではなからうか。したがって「アダナ」と「アザナ」の例はザ行とダ行の混同例というよりも、もともと似た語形を持つ二語が意味の接点を介して混同した、というような、語彙的な問題として考えるべきではなからうか。「アダナ」と「アザナ」の混同例にかぎって用例が即座に集まり、他のダ行・ザ行の混同例よりも早い時期に出現するというのも不審である。「アザナ」と「アダナ」の混同は、小林の指摘どおり鎌倉時代からあると思うが、これを根拠にして、鎌倉時代にザ行とダ行の音韻が混乱が生じていたとは言い難いように思う。

史的な考察は他にも岸田武夫『国語音韻変化論』(武蔵野書院、1998)もあり、そこでも例が挙げられる。そこに挙げられている「クヅカツラ〜クツカツラ(十卷本字類抄)」の例は、十卷本『伊呂波字類抄』(巻六、古辞書叢刊による)、三卷本『色葉字類抄』(黒川本、中七二ウ)、天理図書館本『世俗字類抄』(下22オ2)など、いずれも「クスカツラ」の語形のみが掲載されている。岸田が指摘する「クツカツラ」例は何らかの誤解に基づくものではなからうか。「キザハシ〜キダハシ」は岸田1998が挙げた『蒙求抄』の例よりも、『日本国語大辞典』掲載の応永本論語抄(1420)「きだはしを土にて高からず三尺也」の例のほうが古いが、「キザハシ」と「キダハシ」は、「キザ=刻み」、「キダ=きれめ、単位」というような意味に接点を持つ二語として接近したのではなからうか。「ナズラフ〜准ナヅラフ(遺跡講式)」の例は金田一春彦『四座講式の研究』掲載の元禄版『遺跡講式』で確認を試みた。「唯視^{ミテ}日^ヒ以^{ナラ}准^{トウサイ}東西^ニ」(唯、日を視て東西をナノラバ)とある箇所と思われるが、訓が一致しない。

以上のようにしてみると、奈良〜鎌倉時代のザ行とダ行の混同の例として挙げられる例の中で、音韻が原因で混乱していると考えられる例は皆無であることが分かる。奈良〜鎌倉時代の用例はあまり確実な例とは言えないのではなからうか。そうすると『梁塵秘抄』349の「さだへ」や「常啼」を表す「常在」も『梁塵秘抄』が成立した平安末期の例ではなく、書写が行われた室町時代の用例と考えたほうが良いのかもしれない¹⁰。

9 濱田敦『国語史の諸問題』(臨川書店、1986)137頁参照

10 その『梁塵秘抄』349は「備後の鞆の鳥」の歌であるから「土地の方言を反映させた」という説明が小林芳規1993にはあるが、なぜ「さたへ」部分だけに方言形が用いられるのか、理由が明快でないように思う。歌自体としては五七音を基調とした、中央語による端正なものである。この用例は『梁塵秘抄』成立時(平安末期)の語形を伝えていないのではないか。「さ々へ」を「さ多へ(草体)」(天理図書館善本叢書16『古楽書遺珠』、1974)に誤写したというような事情を想定すべきかもしれない。歌の意味には直接関係しないことではあるが、ザ行とダ行の混同例としては重要な例なので、さらに考察する必要がある。

方言におけるザ行とダ行の混同

方言からのアプローチとして杉藤美代子に一連の論文がある。杉藤1981「ザ行音・ダ行音・ラ行音の混同地域の分布と混同に実態」(『大阪松陰女子大学論集』18)で、日本言語地図「風」「税金」「蛙畔」「痣」「数える」)の重ね合わせでは近畿、島根、山口、大分、静岡、鹿児島に分布域が集中し、現代語においてこの現象が残存しているのは西日本に偏っていると結論されている。一方、アンケート調査によるザ行・ダ行混同の言語地図では、この現象が全国的に分布する現象であるように述べられる。青森下北方言は「クラスの少数が混同している」の記号が与えられている。杉藤1982「近畿地方におけるザ行・ダ行・ラ行音の混同について」(『講座方言学7 近畿地方の方言』、昭和57)にザ行・ダ行混同の言語地図があるが、近畿、島根、山口、大分、静岡、鹿児島に分布域が集中していることが示された。杉藤1982「四つ仮名の混同と「ザ・ゼ・ゾ」―「ダ・デ・ド」の混同に関する史的考察」(『樟蔭国文学』19)ではほぼ近畿地方がザ行・ダ行の混同の調査対象となっている。

杉藤の一連の論文は杉藤美代子1996『日本語音声の研究3 日本語の音』(和泉書院)にまとめられてほぼ原論文のまま掲載されている。第二章でザ行・ダ行(そしてラ行)の混同の全国の実態、近畿圏の具体相が詳しく調査されている。杉藤1996第三章ではザ行・ダ行の混同と四つ仮名の混同の関係を論じ、「四つ仮名」が完全に混同し終わって…(中略)…「ザゼゾ・ダデド」の混同がとくに周辺の田舎において広く行われていた」(著作集3の166頁)としている。第四章でこうした混同が生じる理由をザ行の破擦音化によるとダ行との調音上の類似に求め、調音音声学的分析が行なわれている。

言語地図の重ね合わせとアンケート調査では結果が食い違っていることや、混同の時期を何時とみるか、などの問題が残されていると思われる。

ザ行・ダ行の混同と四つ仮名

上述の考察を経てみると、ザ行とダ行の混同は語彙的な混同を除外すれば、奈良・平安・鎌倉時代まで辿らないのではないかと。さらに用例を精査する必要があるが、ザ行とダ行の混同は、室町期以降ではなかろうか。ちょうど、四つ仮名の混同と同時期(またはその後)に生じた現象ではなかろうか。このように考えることによって、ザ行とダ行の混同は問題点がすっきりと絞られると思う。

すなわち、(A)室町時代以降、サ行・タ行清音が混同しないのにザ行とダ行が混同すること、(B)西日本でザ行とダ行の混同が目立つことが、この現象の解明の鍵になっていることが分かる。

この(A)(B)を解決するためには、(A')室町時代以降、ザ行が[dz] [dʒ]のような破擦音に転じたというような、ザ行の濁音にダ行濁音との接近を認めること、(B')ダ行の口蓋化が東西方言で相違していたこと(「デアル」(dea)が東日本で「ダ」となり、西日本で「ジャ」となること)、のような説明を用意する必要があるはしないだろうか。

江口泰生2015「タタリノフ著『レクシコン』からみた18世紀下北佐井方言の四つ仮名」(『国語と国文学』平成二十七年九月号)で、東北方言では四つ仮名は語頭において破擦音、語中尾においては摩擦音で合流したと考えたことも証拠となる。

また亀井孝「室町時代末期における多行音の口蓋化について」(『亀井孝論文集3』所収、吉川弘文館、昭和59)では、東国ではダ行の口蓋化が退行したと考えている。『レクシコン』にザ行とダ行の混同例が少なく、すでに終焉を迎えていることと合致するように思う。

このように考えることによってサ行タ行は混同しないがザ行ダ行が混同すること、ザ行ダ行の混同が西日本に多く残存していることがスムーズに説明でき、これまでに明らかにしてきた四つ仮名の合流とも密接に関連させることができると思う。

本稿では江戸時代の下北方言にもザ行とダ行の混同があったこと、そしてそれを正しい形に訂正できる程度の内省があったこと、下北方言ではザ行・ダ行の混同は江戸時代にはすでに終息しかけていること、杉藤のアンケート調査では全国的な現象のようにみられるが、言語地図の重ね合わせの方が実態を正確に反映しているらしいこと、を指摘した。さらにザ行とダ行の混同の発生時期が室町時代以降であるとし、その要因について(A') (B')の私案を述べた。

『レクシコン』は従来の考察に新しい観点を加えることが可能な資料であるといえる。

『レクシコン』注釈8(Y~X)

【Y】						
860	037b	ут'ро	(朝)	аса	あさ	アサ(朝)
861	037b	утромь	(午前中に)	асанй	あさに	アサニ(朝に)
862	037b	утренья зоря	(朝の起床合図)	асано ю^аге	あさの よあけ	アサノ ヨアゲ(朝の夜明け)
863	037b	утрен'няя роса	(朝露)	асано абу	あさの あふ; つゆ	アサノ アブ(朝のあぶく)
		*『日本方言大辞典』に「あふ ① あぶく。青森県上北郡082」とある。082は『野辺地方言集』を指すが、アブという清音形が野辺地に、アブという濁音形が下北方言に併存していたものか。				
864	037b	умный	(賢い)	фаз'ме	はすめ	ファズ'メ(はじめ)
		*村山1965は「発明」とする。『日本方言大辞典』に「はじめる 頭が良く広く物を知って学問がある。青森県津軽075」とある。こちらではなかろうか。				
865	037b	упаль	(落ちた)	окайрймашта	をかいました	オカイリマシ'タ(おっ返りました)
		*ロシア語「упасть」(落ちる)参照。 『日本方言大辞典』にもこの用例が採取されている。				
866	038a	утонуюль	(溺死した)	капари шймашта	かは'りしました	カバリ シマシ'タ(カバリしました)
		*『日本方言大辞典』では「かばりとり」で「おぼれている」で秋田の例しか挙げてないが、下北方言にもあったと思われる。「カバリ」はサ変動詞の語幹部分か。オノマトベかもしれない。				
867	038a	утонець	(沈む)	капари шймась	かは'りします	カバリシマ'ス(カバリします)
		*ロシア語は「утопать」(沈む)参照。				
868	038a	уснуль	(寝入った)	немашта	ねました	ネマシ'タ(寝ました)

869	038a	умеръ	(死んだ)	шийнмашта	しにました	シニマシ [°] タ(死にました)
		* ロシア語は「умирать」「умереть」参照。				
870	038a	уково	(何処から)	догогара	とこから	ドゴガラ(何処から)
		* ロシア語「у + кого」参照。				
871	038a	умаляю	(減少する おとしめる 過小評価する)	ташймасу	たします	タシマス(たします)
		* 村山1965では日本語を「足します」と訳し、「ロシア語は「減少する」である」という但し書きがある。ロシア語「減少する」に対して日本語訳「足します」が宛てられていることに不審を感じたのだろうか。「умалить」には「おとしめる、過小評価する」という意味がある。『日本方言大辞典』の「たす」には「告げ口する。言いつける」が岩手、宮城、和歌山などにあり、こちらではなかろうか。そのように取ると、ロシア語との意味の乖離がなくなると思う。				
872	038a	утру\ж/даю	(迷惑をかける)	тайги сашимась	たいきさしま	タイギ サシマス [°] (大儀さします)
873	038a	убыло	(減少した)	фймашта	ひました	フィマシ [°] タ(萎ました)
874	038a	убавиль	(減らした)	вагимашта	わきました	ワギマシ [°] タ(分けました)
875	038a	убавлялю	(減少する)	вагймась	わきます	ワギマス [°] (分けます)
876	038b	уголь	(石炭)	сумй	すみ	スミ(炭)
877	038b	угольная яма	(石炭の穴 = 採掘穴)	сумйно ана	すみの あな	スミノアナ(炭の穴)
878	038b	угольщикъ	(炭作り)	сумй ягу вто	すみ やく ひと	スミ ヤグ フト(炭焼く人)
879	038b	укорйль	(咎めた 非難した)	одезгй шймашта	おてつき し ました	オデズ [°] ギ シマシ [°] タ (お手ずきました)
		* 村山1965に欠。「オテツキ」とも考えられるが意味に差がある。次のように考えてはどうだろうか。『日本方言大辞典』に「てずきほずき 人やものをあれこれひねくり回すさま。岩手県平泉108」や「てずくな 手いたずら。手遊び。また、よけいなことをすること」として長野県や新潟県中頸城郡などに分布しているとある。かつて「テズク」という語形で「人やものに無用の非難やちょっかいをする」意の動詞があったのではなかろうか。				
880	038b	укоряеть	(非難する)	одезгй шймась	おてつき し ます	オデズ [°] ギ シマス [°] (お手ずきます)
881	038b	ушаль	(行った)	і гймашта	イきました	イギマシ [°] タ(行きました)
		* ロシア語「ушель」参照。				
882	038b	указь	(布告)	квайжо	くわいしやう	クワイジョ(会状)
		* ベトロワ1962の音声特徴11に合拗音という指摘がある。				
883	038b	указаль	(教示した)	ошемашта	をせました	オシエマシ [°] タ(教えました)
884	038b	ушй\б/	(怪我をさせる 傷つける)	адемашта	あてました	Адеマシ [°] タ(当てました)
885	039a	укусъ	(酔)	съсу	す	ス [°] ス(酔)
【Φ】						
886	039a	фельбанъ	(このロシア語、不明)	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
		* ロシア語は教会語辞典、古語辞典、ダーリ辞典などに見当たらず、不明であるし、キリル文字日本語・ひらがな日本語もないので、手がかりがない。「шелбанъ」(打撃)の可能性もあるかもしれない。「фелонъ」(法衣、袈裟)かもしれない。とにかくよくわからない。				
887	039a	фонарь	(ランタン)	чоожйнь	ちやうをちん	チョオジン(提灯)
888	039a	флогоръ	(旗)	фада : нобори	はた : のほ [°] り	ファダ ; ノボリ(旗 幟)
		* ロシア語「флагоръ」(旗)、「флюгер」(風信旗)参照。				

A. タタリノフ『レクシコン』注釈8 (Y~X) — 付: ゼ行とダ行の混同について — (江口)

889	039a	флейтузь	(フルート)	фуге	ふ江	フイエ(笛)
		* ロシア語「флейта」(フルート)参照。				
890	039a	флегмагикъ	(痰症の人)	таньможйно вто	たんもちのひと	タンモジノ フト(痰持ちの人)
		* Макс Фасмерの古語辞典《Этимологический словарь русского языка》(1987、1986、モスクワ、прогрес社刊)によれば、「воспаление」(炎症など)の意。「タンモチ」は肺結核や喘息などで「痰症」の人か。				
891	039a	флегма	(鈍重な人 粘液)	тань можи	たんもち	タンモジ(痰持ち)
892	039a	фартукъ	(エプロン)	майдарй	まいたり	マイダリ(前垂れ)
893	039b	форма ; монера	(形 ; やり方)	када	かた	カダ(型)
		* ロシア語「манера」参照。ロシア語a→o。				
894	039b	фйгиль	(燈心)	фйн'на	ひんな	フィンナ(火麻縄 ひおな)
		* 村山1965では「火縄」に当てる。ヒナワからヒンナが生じるためにはナの撥音化、ンワの連声という過程を想定しているのだと思う。ありえないことではないと思うが、『レクシコン』では連声は見当たらないので、遠い感じがある。そこで本資料にみられる現象を踏まえて、以下のように考えてはどうだろうか。オナという語がある。「日本方言大辞典」では「おな [麻縄] 麻糸。麻縄」として千葉県君津郡や神奈川県中郡が挙げられている。また佐藤「南部のことば」に「お[麻]おだね(麻種)、おがら(麻殻)」の例がある。「麻」のことを「オ」という地方は広いので、「オナ」という語形があったのではなかろうか。このオナにヒがついたヒオナ形が鼻音の前で単独母音が撥音化したと考えるのである。ヒオナの鼻音の前の単独母音オが鼻音化(撥音化)したのではなかろうか。鼻音の前の単独母音が鼻音化する類例はメイボ→メンボ、ナイギ→ナンギ、ヤウニ→ヤヌニ、ビイドロ→ビンドロなどがあり、それと同じ現象と考えてはどうだろうか。江口2014「A. タタリノフ『レクシコン』注釈1」(『岡山大学文学部紀要』62)も参照されたい。				
895	039b	фйлийнь	(おおみみずく フクロウ)	фугурудори	ふくるとり	フグルドリ(梟鳥)
		* 『日本語方言大辞典』2413頁に「164ふくろう(梟)」の言語地図がある。青森県ではオホドリ、モホドリであるが、下半島ではフクロ(一)である。フクロウがウ段化した語形と思われる。これは迫野虔徳1998「文献方言史研究」が説くように、開合の合流にともなって合音がウ段長音へ逃避した現象であろう。				
896	039b	фан'за	(絹織物)	кусури	くすり	クスリ(かすり)
		* ベトロフ1962では見出しロシア語は「中国の絹織物」でシベリア方言とする。「絹織物」カスリをクスリと呼んだと思われる。				
897	039b	фатера	(将校家族用の宿舎)	ядо	やと	ヤド(宿)
		* この見出しロシア語については、村山1965ではロシア語の意味は挙げておらず、「фатера」とのみ書いている。現代ロシア語では「ホテル」は「отель」で綴りが合致しないから、「фатера」の意味がわからなかったのだと想像される。しかし「ТОЛКОВЫЙ СЛОВАРЬ ЖИВОГО ВЕЛИКОРУССКАГО ЯЗЫКА」をみると、「фатера」は「квартина」(アパート)や「жилье」(人の住むところ)という説明がある。これに該当するのではなかろうか。				
898	039b	флагъ	(旗)	нобори	のぼり	ノボリ(幟)
899	039b	фельтъ маршалъ начальникъ армія	(軍の元帥)	юкса шйру годо оки реги реги шу втоде гозарь	ゆくさ しる こと をき くれき くれきし やう ひとつて こさる	ユクサ シル ゴド オキ レギ レギ シュ フトデ ゴザル。(戦知る事 大っきい 歴々衆 人で 御座る)
		* ロシア語は「фельдмаршал」(帝政時代の)元帥参照。				
【X】						
900	040a	хто	(誰)	дага	たゝか	ダガ(誰が)
		* ロシア語「кто」参照。				
901	040a	хто пйшоль	(誰が来たか)	дага кймашга	たゝか きました	ダガ キマシタ(誰が来ました)
902	040a	хочу	(したい)	фошй гозарь	ほしこさる	フォシゴザル(欲し御座る)
		* ロシア語「хочу」参照。江口2013(『語文研究』110)では「ホシゴザル」は「ホシュゴザル」ではなく語幹「ホシ」に接続することから願望表現に特化した表現であることを述べた。				

903	040a	хощешъли	(欲しいか)	фoшй гoзaрукa	ほし こさる か	フォシゴザルカ(欲し御座るか)
		*ロシア語「хочешли」参照。				
904	040a	хромый	(跛)	бй\к / ко	ひ`こ	ビッコ(跛)
		*ロシア語は「хромец」(びっこの人)参照。				
905	040a	хворый	(病んでいる)	ямайго	やまいと	ヤマイト(病人)
		*『日本方言大辞典』に「病人」の意味で本例を採用する。『野辺地方言集』にも「ヤメト」とあり、東北地域に広がる語形と思われる。なぜ有声化していないのだろうか。 この語は中央語に古くからあり、『玉塵抄』三「老よりきわまってやまいとの如なとわれと云たぞ」の例が『日本国語大辞典』に掲載されている。ヤマイトはヤマヒヒトがハ行転呼音化した形式だと思ふ。その際、ヒが無声化したか、ヒヒ→イーと長音化したせいでヤマイトのトは有声化しなかったのだと思われる。 一方、御草子・高野物語「ますかみくりてうめきは、ただやまうどにことならず」、『日葡辞書』には「yamoVdo」(ヤマウド)がある。これは濁音形だったようだが、ナカ+ヒト→ナカウド、ワカ+ヒト→ワカウド、イモ+ヒト→イモウトのようにヤマ+ヒト→ヤマウト(ト)とウ音便化した語形であり、濁音化する場合があったと思われる。江口2015「A. タタリノフ『レクシコン』注釈3(ж~и)」(『岡山大学文学部紀要』63)参照。				
906	040a	хвораеть	(病気である)	ямай шймась	やまいします	ヤマイ シマス°(病みます)
907	040a	хлопаеть	(叩く)	тадагймась	たゝきます	タダギマス°(叩きます)
908	040a	хлопнуль	(叩きつけた)	тадагймашта	たゝきました	タダギマシ°タ(叩きました)
909	040a	хлопчатая бумага	(綿織物 綿)	вада	わた	ワダ(綿)
		*ロシア語は「хлопчатка」(綿織物)参照。				
910	040b	хорекъ	(鼯鼠)	і дажі	イたち	イダジ(鼯鼠)
		*ロシア語は「хорёк」(けながいたち)参照。				
911	040b	хомуть	(首輪 重荷)	キリル文字日本語なし	ひらがな日本語なし	
912	040b	хвостъ ко\н / ско	(馬の尾 ポニーテール)	шйриво	しりを	シリヲ(尻尾)

(つづく)

付記：平成26年～平成28年度、科研費の基盤研究c-(課題番号26370536)「十八世紀青森下北方言を反映するタタリノフ『レクシコン』についての文献方言史的研究」の支援を受けた。記してお礼申し上げる。